

『忠臣水滸伝』における<付会の論理>(上)

著者	石川 秀巳
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	9
ページ	246-230
発行年	2001-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34506

『忠臣水滸伝』における〈付会の論理〉(上)

石 川 秀 巳

一

山東京伝の読本『忠臣水滸伝』(前編五卷五冊、寛政十一年(一七九八)十一月刊、後編五卷五冊、享和元年(一八〇〇)十一月刊)が竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』(寛延元年(一七四八)八月初演)と中国長編白話小説『水滸伝』との付会に成ったもの——『仮名手本忠臣蔵』の世界に『水滸伝』の趣向を取り込んだものであるとは、近世小説研究のほとんど初めての成果とも言うべき藤岡作太郎『近代小説史』が、

忠臣水滸伝は即ち此の両者の結び附きて成りしものにて、人物を仮名手本忠臣蔵にかり、事件を水滸伝に取り、忠臣蔵の事実を巧みに水滸伝に附会したるなり。(1)

と記したのから、近年の新しい文学史が、

『忠臣水滸伝』は『仮名手本忠臣蔵』を始めとする『忠臣蔵』物を

世界とし、『水滸伝』を趣向として取り入れて成り立った。(2)

と記すのまで、本作を論ずる誰もが決まって言うことである。このような記述の類型は初刊当時からすでに成立してもいて、たとえば『出像稗史外題鑑』(文化末年刊カ)は、

かなでほん忠臣蔵をもろこしの小説水滸伝になぞらへて作る(3)

と要約し、為永春水『増補外題鑑』(天保九年(一八三八)刊)も、

忠臣蔵ちうしんざうを水滸伝すゐこでんのおもむきにつゞりて其文章そのぶんぎやうめづらかに一家いつかの風を著あらはしよみ本ほんのかゞみといはんか(4)

と評した。曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』(天保五年(一八三四)成稿)の当該記事を引くのは『忠臣水滸伝』を論ずる場合の常套であるが、『稗史外題鑑批評』(天保十年(一八三九)成稿)で春水の読本理解を批判した馬琴にしても、

この冊子は、仮名手本忠臣蔵の世界に水滸伝を撮合して、おかしく作り設けたり。是京伝が国字の稗史を綴る初筆也。且水滸伝を

剽窃摸擬せしもの、是より先に曲亭が高尾船字文ありといへども、それは中本也。又振鷺亭が伊呂波水滸伝のごときは、醉語と題して相似ざるもの也。か、れば、綾足が本朝水滸伝有りてより以来か、る新奇の物を見ずといふ世評特に高かりしかば、多く売れたり。(5)と、同様の把握を示すのである。『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との付会・撮合という基本的理解は、『忠臣水滸伝』の発刊以来、なにほども変わりしなかった。

この一様さはそうした理解が『忠臣水滸伝』の本質を言い当てていたことを意味するのだろう。しかも、それは京伝自身の意図に合致するものでもあった。大高洋司によれば(6)、前編が出版される二年前の寛政九年(一七九七)、馬琴作の黄表紙『武者合天狗俳諧』の巻末広告に「和国忠義大星水滸伝」五冊の刊行が予告されていた。

此書は傀儡の謡曲仮名手本忠臣蔵を、拠として太平記に本づき水滸伝に倣ひ忠臣孝子義男貞女の趣を切にしたり(7)

また、これも大高の指摘するところだが、寛政十一年(一七九九)正月刊、馬琴作『世諺口紺屋雛形』の巻末広告には、「忠臣水滸伝前編」五巻の予告が、

此本は太平記を主意とし水滸伝の趣をうつし唐土の小説にならひて仮名手本忠臣蔵の十一段を十一回にかきとり忠臣孝子義男貞婦の作業を記したる稗史なり(8)

と見える。当初の予定では全五冊だったのが後に前編のみで五巻という規模に拡大されたけれども、『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との付

会という基本構想は一貫している。実際に刊行された『忠臣水滸伝』はその構想に沿って書かれたに相違ない。『忠義水滸伝』をもじった『忠臣水滸伝』という書名自体がそうした方法を明示しているのである。したがって、本作について論ずるためには、『仮名手本忠臣蔵』の各場面に『水滸伝』のどの部分が写し取られたかの検討がまず要請される。もつとも、その点についてはすでに麻生磯次によって洗い上げられ(9)、撮合の関係はほぼ明らかになっている(白話語彙の多用など文体面の影響に關しても詳細な調査が備わる(10))。だが、『水滸伝』中のある挿話が『仮名手本忠臣蔵』の当該部分に付会された理由は見えてこない。京伝が何故このような方法をとったのかを考えることが必要なのではないだろうか。

演劇と小説の付会という方法が馬琴『高尾船字文』(五冊、寛政八年(一七九六))の模倣であることも言われている。馬琴は、序文代わりの「凡例」に、

此書や。戲房は唐土の稗説に倣ひ。戲廂は日本の演史を引く。(11)

夫は小説の水滸伝／是は戲文の先代萩

と角書きして、この作品を中国小説『水滸伝』と浄瑠璃『伽羅先代萩』との付会によって書き上げたことを表明する。こうした方法に關して、たとえば水野稔に、

『水滸伝』と『伽羅先代萩』と、彼と此とのほめこみ、こじつけという知的な奇巧にすべてよりかかっていた点では、いわば狂歌・

黄表紙風の発想による戯譚の作品なのである。⁽¹²⁾

という指摘があるごとく、しばしば黄表紙との類縁が指摘される。方法を馬琴に学んだとすれば京伝に対する評価がそれと似てくるのは当然なのだが、水野は『忠臣水滸伝』についても、

黄表紙作者の付会の妙を尽くした滑稽戯譚の文学⁽¹³⁾

と評した。また重友毅は、

その手慣れた黄表紙の手法をもって話を軽妙に進め、あざやかな

附会の妙味を発揮した⁽¹⁴⁾

と、同様の評価を下している。先行研究はこうした付会を黄表紙的発想によるものであると理解してきたのである。

しかしながら、どのような事実を指して「黄表紙的」と言うのか、水野・重友らに具体的な指摘はない。『忠臣水滸伝』の専論は必ずしも多くないのだが、その一つの論者である清水正男も、「京伝ならではの附会の妙」が「この読本のもっとも大きな魅力となっており」、「附会に際してとられた方法は黄表紙的なものであった」と言う。けれども、その「黄表紙的」な方法について触れるのは、『水滸伝』の「智取生辰綱」における蒙汗薬の詐術を複雑化し解毒剤のほうに毒が仕込んであったと改めたところを取り上げて、「原拠の説話をたくみにひとひねりひねって附会し」また「人間心理の弱点ともいうべきものを衝きながら話が軽妙に進められている点」などに「京伝の黄表紙作者的感觉によるものというよりほかにいいような話の面白さ」を指摘するくだりのみである⁽¹⁵⁾。諸家によって、『忠臣水滸伝』における黄表紙的な

付会など改めて説明するまでもない一読して明らかことと扱われてきたように見える。

『高尾船字文』を構想する馬琴が何故そうした方法を案出したのかは別の機会に考えることとして、ここでは京伝の意図の在処を確認しておきたい。「忠臣水滸伝自序」に、京伝は執筆の動機を記しとどめている。

夫魁疊院本謳語為腔調。以成排戲。有題忠臣蔵者。觀其為書。掇太平記。翻案高執政淫視塩廷尉之嫡夫人（中略）之事。以為十一回。（中略）嘗每檢施耐菴水滸伝。覺有所類。夫戲曲者也。遂翻思構意師直之乗権与高貞之獲罪。比諸高俅及林冲。作忠臣水滸伝。⁽¹⁶⁾

「太平記」に「掇」り「高執政淫視塩廷尉之嫡夫人（中略）之事」を「翻案」した「忠臣蔵」と「題」する「十一回」の「魁疊院本」は言うまでもなく「仮名手本忠臣蔵」を指す。その「院本」と「水滸伝」とに基づいて「忠臣水滸伝」を「作」ったというところは、前引の刊行予告と変わらない。問題としたのは、その「仮名手本忠臣蔵」と「水滸伝」とを「比」るのに「所類」あることを契機としたと記す箇所である。この点に着目した徳田武は、

両者に類似した場面や趣向を見出し、その発見に基づいて本来何の影響関係もない両者を撮合してみせ、その意外な着想に読者を感嘆させる⁽¹⁷⁾

ことに京伝の意図があったと適切に解している。その「所類」の例として、京伝は「師直之乗権与高貞之獲罪」と「高俅及林冲」との類似

を挙げた。それに基づいてだろう、徳田は「師直が判官の妻貌好に懸想するところは高俵が林冲の妻に対する横恋慕に基づく」と指摘する。人妻に邪恋をしかけるのが一方は権力者本人であり他方は権力者の養子であるなど細部に違いはあるけれども、いずれも邪恋のために権力者が夫を破滅させる話だから、両者はたしかに類似性を持っている。だが、師直―かほよ―判官の構図が高俵(衙内)―林冲の妻―林冲のそれと対応するとしても、他の箇所についてそれほど明瞭な類似を指摘しうるわけではない。

京伝は作中の人物や事件が『水滸伝』に似ていると叙述中にしばしば記しており、付会した箇所についての自注と見ることができる。たとえば、加古川本蔵女房戸難瀬を「梁山泊の女将一丈青扈三娘が再生にやあらん」(第八回)とし、天河屋義平が「かの宋代の豪傑九紋龍史太郎が為人をしたひて。背上に雲龍の花繡を刺けるゆゑに。時の人皆彼が混名を黒雲龍義平と做叫」(第十回)たとするのだが、しかし、戸難瀬と一丈青扈三娘、天河屋義平と九紋龍史進のあいだに、いかなる類似が認められるだろうか。

またたとえば、『水滸伝』第十六回「楊志押送金銀担／呉用智取生辰綱」の黄泥岡における生辰綱略奪の物語を取り込むとき、何故それと『仮名手本忠臣蔵』五段目「恩愛の二つ玉」とを重ね合わせ、しかも、加古川本蔵をそこに登場させなければならなかったのか。第二十三回「横海郡柴進留賓／景陽岡武松打虎」において行者武松が殴り殺した虎と山崎街道を駆け抜けた猪とを撮合するのは、いずれも獣が登場する

ところに類似性を認めうるとしても、その猪を殴り殺す役が千崎弥五郎に割り振られたのは何故か。

両者間に、そうした付会の根拠を与えるような類似は見出しがたい。にもかかわらず京伝が「所類」を認めたのだとしたら、そこには京伝独自の論理が働いていたに違いない。本稿の目的は、これまで指摘された典拠関係に基づきながら、その背後で働いたと考えられる〈付会の論理〉を析出することにある。「黄表紙的」との評価はこの〈付会の論理〉に結びつくはずである。

二

以下、回ごとに『水滸伝』と『仮名手本忠臣蔵』とを比較していくが、断っておきたいことがある。

十一月に刊行したのすら『仮名手本忠臣蔵』十一段に合わせたものである⁽¹⁸⁾とまで言いうるかはともかく、前引の広告中に書かれていたように、「十一段を十一回にかきと」るところに趣向を設けたのは間違いない。ただし、たとえば三段目の〈殿中刃傷〉が本作では第二回に語られるなどの食い違いがいくつも存在するから、『仮名手本忠臣蔵』と『忠臣水滸伝』との段一回が対応するかの言うのは正確ではない。

また、たとえば『仮名手本忠臣蔵』七段目、祇園一力茶屋の場面が『忠臣水滸伝』では第七回に語られて一応の対応を認めうる場合であっ

でも、第七回が一李達屋のみに舞台を限定して語っているわけでないことに留意しておくべきだろう。舞台芸術である『仮名手本忠臣蔵』は、空間移動そのものを見せる「道行」の他は、当然のこと段ごと場ごとに「所」を固定して語る必要があったのに対し、小説である『忠臣水滸伝』はそうした制約から自由であり、場面移動がはるかに容易なのである。

同じく『水滸伝』を翻案した伊丹椿園『女水滸伝』（天明三年（一七八三）刊）や振鷺亭『教訓いろは醉故伝』（寛政六年（一七九四）刊）あるいは『高尾船字文』では、一つの回に語られる物語はその回の中で一応の完結性を持ち、前後の回にまたがって語ることがなかったのに対して、京伝は、回の末尾に話の区切りをおかず、次回まで引き延ばして回の途中で次の挿話に切り替えるという、白話小説の叙述法を意図的にまねている。しかも、話柄が途切れるか、次の回に連続するかによって、回末表現を変えている。大団円である十一回を除いて、他の十回について回末表現は次のように二分される。

(A)「畢竟師直家に回怎地か計る。且下回に分解を聴。」（第一回）
ひつまいき せんかい へい いか かつ くだわに ぶんかいを きけ おんつまり

のような「畢竟」型（他に、第二・三・四・五・六・八回）

(B)「さて後來如何ことかある。……且下回に分解を聴。」（第七回）
このちいかなる まつぎのくだん とまわくる ぶんかい

のような「後來」型（他に、第九・十回）

(A)「畢竟」型は話を終結させずに次の回まで続ける場合の、(B)「後來」型はそこで話を終結させて次回から新しい話を語り出す場合の記述法である。

次節以降、『仮名手本忠臣蔵』各段と『忠臣水滸伝』各回とを比較して具体的に「付会の論理」を探っていく。回目を掲げ梗概をまとめたうえで検討を加えるが、回の単位と物語の単位との間に右に述べたずれが存するので、回目に対応する内容を前後の回から繰り込む場合がある（梗概中、「」は前後の回から繰り込んだ部分を意味する）。

三

『仮名手本忠臣蔵』第一段「鶴岡の饗応」は、鎌倉鶴岡八幡宮社前、新田義貞の兜を奉納せよとの足利尊氏の命を受けて下向した足利直義の指示に対して高師直が反対し、桃井若狭助との間に論争が起こるが、塩治判官の妻かほよに義貞の兜を確認させ、奉納することになるまでの経緯を語る。この「大序」を、京伝は次のように作り変えた。『忠臣水滸伝』第一回の分析から、京伝の方法を窺ってみよう。

（第一回「夢想国師祈禳天災／高階師直誤走衆星」）

北朝光明帝の御宇、南朝の亡霊の祟りによる怪異・疫病のため、新田義貞の兜をもって亡霊を鎮めるべく、足利直義が鎌倉に下る。兜を祀ることの是非をめぐる論議があったが、直義は師直・塩治判官に墳墓に安置せよと命じる。極楽寺の切り通しを掘らせる、泥中より石室が現れた。師直が石室上の「遇高而開」の四字をたてに無理に開かせると、下には深い穴があり、四十余道の

金光が四散した。これこそ四十余の流星出現の兆であった。

第一回を、(1)〈兜奉納の発案〉、(2)〈兜改め〉、(3)〈土中からの四十七星出現〉、の三つの部分に分けて捉えることができる。(4)〈師直が鶴岡八幡宮で貌好に戯れかかること〉、は、第二回「妍娘羞謎襲衣篇／塩廷尉誤入白虎庁」に包摂して検討する。

(2)の〈兜改め〉のくだりは、兜の鑑定役をかほよから氏家重国に改めるなど細部の変更はあるものの、都から足利直義が鎌倉に下向し、論議の末、義貞の兜を確認して奉納するという枠組みを『仮名手本忠臣蔵』から受け継ぎ、その骨格に基づいて書き換えている。『仮名手本忠臣蔵』にはそのまま従っていると云つてもよい。(1)の〈兜奉納の発案〉は、足利直義が新田義貞の兜を鶴岡八幡宮に納めるために鎌倉に下向することを、『水滸伝』第一回「張天師祈禳瘟疫／洪太尉誤走衆星」の〈瘟疫祈禳〉のために張天師を招請すべく洪信が龍虎山に赴くことと重ね合わせたのであり、(3)の〈四十七星出現〉が『水滸伝』の〈百八魔星出現〉を写したものであることは言うまでもない。これを契機として『水滸伝』翻案としての『忠臣水滸伝』を成立させるわけである。

第一回における『水滸伝』利用はあまりにも明らかである。『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』に由来するものと異なる素材を、違和感を持たせずに必然的な展開へと連接させたとくに京伝の巧みさを見るべきなのかもしれない。ここでは、さらにそうした操作を規定したので

あろう京伝の発想を探ってみたい。

『仮名手本忠臣蔵』が義貞の死骸の側に「落散たる兜」「四十七」⁽¹⁹⁾

を持ち出したのは、後に四十七人の義士が登場することの前兆と意味づけたのであり、その点で、『水滸伝』が伏魔之殿内の石碑上に「遇洪而開」の四字を見出したときの、

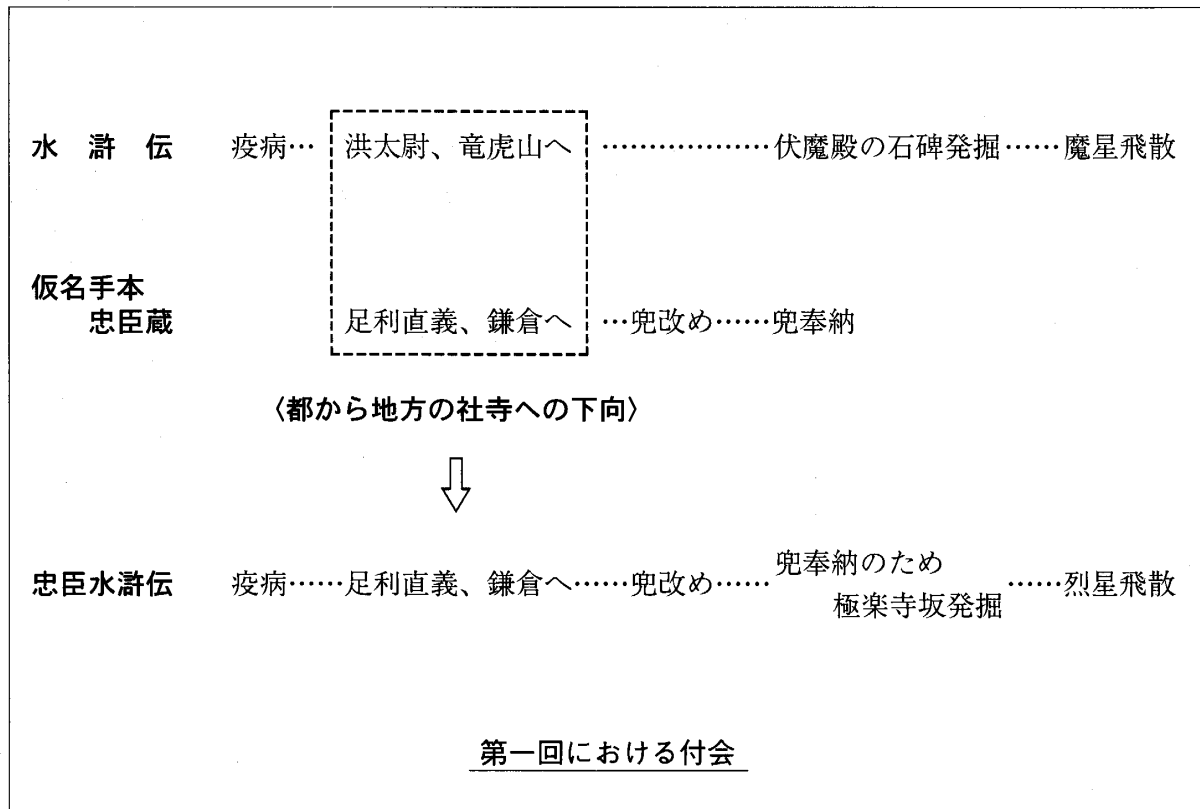
是乃天剛星。地煞性。当二出世スベキ時ニシテ。宋朝二義士顯ルベキ兆ナリ⁽²⁰⁾

という記述によつて梁山泊への好漢結集を予告するのと同じ機能を持つている(和刻本では右と同様に予告し、さらに第一回末尾、百八魔星の飛散を因として「使宛子城一中蔵猛虎、蓼児洼内聚飛龍」⁽²¹⁾と語り、第二回冒頭で「若還放他出世、必悩下方生靈」とする)。いずれにも共通して〈定数の主題〉が存在し、それが付会を誘う「所類」と見なされたのだろう。もつとも、この設定は竹田出雲らが『水滸伝』を模倣したためであるとの指摘があり⁽²²⁾、その説に従うならば類似は当然なのである。なによりもまず、一方が小説の発端(「楔子」)でありもう一方が浄瑠璃の「大序」であるという共通性を発想の起点としたことを考えるべきかもしれない。『水滸伝』を翻案するためにはこの段に発端部の百八魔星飛散の趣向を付会しなればならなかった。

ともあれ京伝は、両作を重ね合わせて、

是乃四十余座の流星方に出世すべき時にして。高階塩冶の両家に希代の珍事を惹出し。大星等四十余人の義臣世に美名を顯すへ

仮名手本



き兆とぞしられたる。(第一回)

と、全編の発端を敷設するのである。

全編の「兆(萌)」を語る記述がもう一箇所あった。足利直義が兜の弔祭を命じられて鎌倉に下ることになったところで、こう語られている。

是乃天災を禳とて反て希代の珍事を惹出し。高階塩冶の両家に凶事おこりて。大星等主公の讐を復し。千歳の後に美名をのこすべき。此一件のことを下来る萌なりけり。(同前)

洪太尉が竜虎山への使者に立つことに相当する箇所だが、『水滸伝』には、これに類する記述は見えない。この重複は『仮名手本忠臣蔵』に依拠した冒頭に別の冒頭を継ぎ足したために生じたと考えられる。直義の鎌倉下着後、鶴岡八幡宮社前の場面から始まる『仮名手本忠臣蔵』に対して、戯曲にはない宮中の評議やその原因となる疫病などを『水滸伝』に従って書き加えたのであり、その付加部分が全編の発端をなすというわけである。このもうひとつの「兆(萌)」に注目するとき、魔星飛散の趣向の利用よりも、発端部分の重ね合わせにこそ京伝の発想が典型的に現れていることが見てくる。

『仮名手本忠臣蔵』冒頭が(赤穂事件の実説における院使・勅使の下向を暗示する)直義の鎌倉下向を語り、『水滸伝』冒頭が洪太尉の竜虎山行を語る。直義は京から鎌倉の鶴岡八幡宮へ、洪信は開封府から竜虎山へ——一方は道士を招くため、一方は兜奉納のためと理由は異なるが——いずれもへ都から地方の社寺への下向」という点において同一と

見ることができる。足利直義と洪太尉とに何らかの類似や共通性が認められるわけではない。京伝は、この「都から地方の杜寺への下向」に関して直義と洪太尉を同等と見做し、それだけを経路として洪太尉の担った竜虎山への使者という役割を直義の鎌倉下向に重ねた。片々たる共通性の発見による「故事付け」こそが京伝の方法だったのではない。

洪太尉は疫病祈禳のために嗣漢天師張真人を招請する使者として竜虎山に下向することになっている。もちろん『仮名手本忠臣蔵』にはそうした「疫病」などといった要素がない。浄瑠璃の設定に基づきつつ、直義の鎌倉下向を「疫病」に関連づけるため、京伝は次のように処理した。

足利尊氏は清和源氏の嫡流である新田義貞の兜を「其儘にも打置れず」八幡宮に納めさせようとした。桃井若狭助の推測によれば、南朝方諸勢力に対して尊氏の仁徳を感じさせ、「攻ずして降参^{かうさん}する御方便」に外ならない。そのように語る『仮名手本忠臣蔵』に対し、『太平記』の記述を媒介に、義貞の死を「洛中^{らくちゅう}に屢怪異^{しばぐわい}あり」「北陸道七州^{ほくろくどうしちしゅう}に。瘟疫^{えんえき}さかん」である原因として設定する。『太平記』からの摂取について後藤丹治に詳しい研究があり⁽²³⁾、「洛中の怪異」は太平記に基づくことが指摘されている。

(一) 仙洞御所に小児の首をくわえた斑犬出現 (巻二十五「持明院殿御即位^附仙洞怪異事」)

(二) 將軍塚鳴動・清水寺炎上 (巻二十七「天下妖怪事^附清水寺炎上事」)

(三) 四条河原の田楽棧敷崩落 (巻二十七「田楽の事^附長講見物の事」)
(四) 空中に馬声・巷に車の軋み音 (巻二十七「天下妖怪事^附清水寺炎上事」)

これらは夢窓国師の修法によって鎮静されるが、その因が六本杉に会した南朝方怨霊にあると取りざたされたとするのは、『太平記』巻二十五「官方怨霊六本杉会事」に依拠した虚構である。なお猖獗を極める「北陸道の瘟疫」も、直接の記事に基づくのではないが、『太平記』世界から発想して新田義貞が戦死した越前国に起こったものとしたわけである。

前引の「予告」「広告」の中に「太平記に本づき」「太平記を主意として」とあったことを想起しよう。『仮名手本忠臣蔵』がもともと『太平記』の「世界」に赤穂事件の「趣向」を仕組んだものだったし、序文に「有題忠臣蔵者、觀其為書、扱太平記、翻案高執政淫視塩廷尉之嫡夫人……之事、以為十一回」とあるように、京伝は『仮名手本忠臣蔵』が『太平記』を世界としていることを明瞭に認識していたはずだから、『忠臣水滸伝』が『太平記』の時代背景を保持しているのは、不思議ではない。だが、『仮名手本忠臣蔵』に付随して自ずと『太平記』の要素が忍び込んできたというのではなく、そこに京伝の意図的な選択が働いたと考えるべきである。後藤も典拠を指摘するにとどまっておき、それを取り込む京伝の意図には言及していないが、『太平記』は背景を提供するだけなのではなく、付会の方法に深く関わっていた。『太平記』にまでさかのぼって、欠けた要素を充填するのである。(後

に見るように、こうした『仮名手本忠臣蔵』関連作の利用は、『太平記』に限らず同時代の『忠臣蔵もの』浄瑠璃や歌舞伎にも向けられる。

第一回の分析から、『水滸伝』を付会する二つの方法を確認しえた。

『仮名手本忠臣蔵』とのあいだに共通項を見出し、それを媒介として両者を撮合するのが『忠臣水滸伝』の基本的方法であり、共通項を見いだしえなかった場合、『太平記』などの『仮名手本忠臣蔵』関連作に撮合の対象を求めるのがもう一つの方法、言わば補助的方法である。以下、これらを範型として検討していく。

四

〔第二回〕「妍娘羞謎襲衣篇／塩廷尉誤入白虎庁」

「師直は鶴岡八幡宮で判官の妻貌好を見かけ、言いよった。貌好は夫のためを考えて怒りを忍んでこの場を逃れようとするが、師直がなお戯れかかるので、貌好の腰元僂児はいずれ自分が媒をすると欺く。」師直は兼好代筆の艶文を送るが、拒絶された。山名次郎右衛門は、貌好を奪う計略を授けた。

早野勘平は街で太刀を売り歩く男に行きあい、判官にすすめて買い取らせた。翌日鷲坂伴内が刀剣を一覧したいとの師直の言葉を伝える。判官は営中の一間に導かれる。白虎庁と気づくとき師直が現れ、この部屋に剣を帯して入るのは直義暗殺の企みであるうと嘲罵する。堪えきれず、判官は師直に斬りかかるが、山名の

ために抱きとめられてしまった。

京伝自身が「師直之乗権与高貞之獲罪、比諸高俵及林冲」と宣言した部分である。そこに「権力者の人妻への横恋慕―夫の破滅」という共通性があったことはすでに述べた。たしかに、構図上の類似はあるのだが、むしろ、つぎのような些末とも言いうる共通点の発見が京伝の発想を促したのではないだろうか。

第二節に述べた理由から、ここでは「殿中刃傷」と合わせて検討するが、実際には師直が貌好に戯れかかる話は第一回の末尾に配置されていた。石板を掘り起こして「四十余道の金光」を飛散させたあと、「何となく心中安からず。身に利害あらんを怕」た師直が八幡宮に参詣したおりの出来事、と巧みに『水滸伝』的展開からの接続を図っている。『太平記』の師直は病気で屋敷に引きこもっていたときに侍従という女から判官女房の美しさを吹き込まれ、恋着するのである。その病気を利かせたわけであろう。鶴岡社頭から極楽寺の切り通しに移った場面を再び鶴岡に返したのは、無論、鶴岡社頭で師直がかほよに言い寄る「大序」に合わせたからである。『仮名手本忠臣蔵』で師直がかほよに迫るのが鶴岡八幡宮であり、高俵の養子高衛内が林冲の妻に戯れかかったのは五嶽廟に参った折だった。「大序」どりの社前での行為にこだわったのは、林冲故事を付会するためだっただろう。京伝が、誠に彼水滸の林冲が妻。五嶽廟において高衛内のためにくるしめられしも。かくぞあらめとおもはれける。（第一回）

と言ひ両者の同一性を明言しているのは、「社寺での誘惑」という点に類似を見出したからだと考えられる。

先に義貞の兜を鑑定する役目がかほよから氏家重国に改められていることを述べた。『太平記』巻第二十「義貞自害事」、戦場において義貞の首を泥中から取りだし、死体確認の場にも立ち会ったのが重国だった。その重国を配することは、一方で『太平記』に基づくという本作のもう一つの方針からすれば、『太平記』との関係を強調する働きを持ちもしたが、なによりも、師直が判官の妻かほよに言い寄ることと『水滸伝』第七回「花和尚倒拔垂楊柳／豹子頭誤入白虎堂」とを付会するのに必要なことからであろう。高衙内は身元を知らぬまま林冲の妻に戯れかかり、後にじやまな林冲を毘に落とすべく高俅等が謀ることになった。侍従に吹き込まれて判官女房に恋着し、艶書・歌を送りつけたりするようになる『太平記』の状況からも離れて、この状況を師直―かほよ―判官の関係に重層させるためには、すなわち、『水滸伝』に合わせて、初めて見た貌好の美しさに惹かれ、声をかけ、艶書を送り、じやまな判官を毘にかける行動を取らせるためには、師直が以前からかほよに思いを寄せていたとする『仮名手本忠臣蔵』の設定に従うわけにはいかなかったのである。

林冲の妻の供をしていた錦児をもじって貌好付きの腰元僊児を設定するのだが、その僊児が、

奴家よき機会を見てひそかに媒をなし誓て志を遂させまゐらす

べし。(第一回)

と師直ををなだめてその場を収めるのは、浄瑠璃の師直が、

彼が召使。かるといふ 秘新参と聞。きやつをこま付頼んで見ん。

(第三)

と心づもりしていたところに基づいているだろうが、さらに、『太平記』の侍従が仲を取り持とうとし(て失敗し)たことに関連づけられている。

「師直之乗権与高貞之獲罪」と「高俅及林冲」とを撮合する経路、全体の構図よりもむしろ細部に関わる共通点は、「社寺での誘惑」以外にも見いだしうる。判官切腹の因となった殿中での刃傷にも「所類」と主張しうる要素があった。林冲は「自家ノ宝剣ト比へ」たいと高俅に誘い出されるが、案内された部屋が白虎節堂であると気づき、

此節堂ハ軍機ノ大事ヲノミ商議スル処ナルニ。故モ無ニ此堂ニ入
ハ尤モ無礼至極ナリ

と驚くのだし、高俅もその点を咎め、さらに、

況ヤ汝手ニ劔ヲ持ケルハ。必定我ヲ殺サント図ルナラン。

と、冤罪を負わせたのである。ここからへ憚るべき場所と刀剣という要素を抜き出すなら、禁制の場所に剣を帯びて入った林冲と場所柄をわきまえず殿中で刀を抜いた判官との間に共通性が浮上してくるだろう。

ところで、浄瑠璃の本文にはないのだが、現行の歌舞伎台本では師直に次のような台詞を言わせている。

師直 殿中だ。

ト中啓にてこれを打つをきっかけに、序の舞になる。判官ハッと思入れあつて、控える。

殿中だぞ。殿中において鯉口三寸抜き放さば、家は断絶、御承知か。御承知だな。御承知とあらば切られよう。サア切らっせい、エ、切れ。 (24)

「殿中」において抜刀すること自体が罪であるように演ぜられるのである。この点において、刀剣を持ち込むことが謀叛の現れであるとして流刑に処せられた林冲の場合と通うものがある。このところ、幕末の台本では、

師直 殿中だ。

ト中啓にて打つ。これにて判官ハッと思入れあつて、ヂツと叩へる。師直ニツタリ、思ひ入れあつて、上手へ行きか、るを (25)

と行きかかる師直を呼び止めて斬りかかるようになっていいる。「殿中において鯉口三寸抜き放さば……」のせりふは見られないけれども、「殿中だ」の一言が短刀を抜きかけた判官を躊躇させるのだから、殿中における抜刀が憚るべきことと見做されていたのはたしかだろう。こうした共通点に着目して京伝は判官と林冲とを重ね合わせようと発想したのだと考えてみたいのだが、ただし右に引用した歌舞伎台本は文久三年（一八六三）のものであり、享和・寛政のころにそのような演出が成立していたかどうか確認することができない。可能性を指摘するにとどめる。

片々たる類似点を取り出し、それを媒介として必ずしも類似するわけではない『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』とを撮合する方法は、第三回においてより明瞭な例を見せる。

（第三回 「桃井侯大開足柄山／郷右衛門夜渡天竜川」）

判官切腹後、原郷右衛門は貌好御前と若君を守って出雲へと落ちる。足柄山野猪林で鷲坂伴内のために捕えられるが、桃井若狭助に救われる。天龍川を渡る船中で船守に襲われ、貌好母子は川中に投げ込まれ、郷右衛門は救出のため水中に身を投じた。奪った荷を持って家に帰った二人の賊が寝ついたあと、幽霊のごとき美女が訪れる。「賊の女房は夫たちが殺した女の幽霊」と思い許しを乞うた。郷右衛門に救い上げられた貌好が、一人はぐれ、ここに來たのだった。若君を介抱する郷右衛門は、主家の異変を聞き鎌倉から出雲に向かう寺岡平右衛門と出会う。二人も賊の家に到り、郷右衛門は賊の女房を斬り殺したが、賊は逃げ去ってしまう。彼等は平右衛門の神行の法によって出雲に向かった。」

第三回が『仮名手本忠臣蔵』第三段「恋歌の意趣」に対応して書かれるのであれば、ここは「刃傷」が語られるべきところである。が第二回すでに語り終えたため、別の挿話が要請されなければならなかった。それで、貌好の逃亡譚が語られたわけである。

この逃亡譚に『水滸伝』が利用されたことも麻生の指摘がある。前段は林冲譚に基づく。判官切腹後、貌好・小衛内は原郷右衛門に守られ本国出雲へと落ちて行くのだが、足柄山に待ち伏せしていた鷲坂伴内のために捕らえられ、引き立てられるところを、そこに登場した桃井若狭助に助けられる。これが、『水滸伝』第八回「林教頭刺配滄州道／魯智深大鬧野猪林」の、護送途中の林冲が野猪林で危うく殺されるところを魯智深に救われる話に基づいているのは確かである。貌好＝林冲、伴内＝董超ら、桃井＝魯智深の対応が認められるし、「野猪林」の語がそれを示している。第二回が林冲冤罪譚を典拠としたのに連続して、林冲流刑譚を貌好の逃亡譚に置き換えた形である。後段が、第三十七回「没遮欄追趕及時雨／船火児夜鬧潯陽江」の、閻婆惜殺しのために流罪となった宋江が潯陽江を渡るとき川賊に襲われる話によることも、麻生の指摘したとおりである。桃井によって一旦は危機を逃れた貌好一行が、天竜川を渡ろうとして乗った船の中で賊に襲われる経緯は宋江故事のままであるし、船頭の口から出る、

麪旗を食し給ふや粽子を食し給ふや。(第三回)

という台詞は、潯陽江の川賊船火児張横のそれをそのまま利用している。『水滸伝』ではそこに混江竜李俊が現れて宋江の危機を救うのだが、京伝は、貌好母子が水中に投じられ、郷右衛門はそれを救おうとしてあとを追って川に飛び込むように変えた。

さらに、この貌好逃亡譚に『太平記』も影響していることは後藤丹治によって指摘されており、巻二十一「塩冶判官讒死事」では、貌好

母子は逃亡の途中で死ぬのだが、それを無事だったと作り替えたものと見ることも可能だろう。

先行研究によって、貌好母子逃亡譚が『水滸伝』と『太平記』とを重層させて成ったことはすでに指摘されていたわけだが、では、『仮名手本忠臣蔵』とはどのように関わるのだろうか。賊の兄弟、手銃六郎・滅法八郎は、『仮名手本忠臣蔵』六段目の「所の狩人三人」に「めつぼう弥八。種が嶋の六狸の角兵衛」のうち二人から作り替えたものである(狸の角兵衛は第五回に登場する)という点では浄瑠璃と結びつけられている。しかし、川から助け上げられた貌好が二人の賊の家に迷い着いて女房に幽霊と間違われたり、貌好とめぐり逢った郷右衛門が賊を退治したりする展開はどうか。それがどのような典拠に基づくのかはわからないものの、『水滸伝』『仮名手本忠臣蔵』のいずれにも関わらないことはたしかだ。『仮名手本忠臣蔵』とは異なる貌好逃亡譚はどこから発想されたのか。

第三回冒頭、判官切腹後に山名次郎右衛門が軍勢を率いて攻め寄せたことが語られる。『太平記』では師直の讒言によって挙兵を余儀なくさせられた判官が領国に逃げるわけだが、その際に追手となったのが山名伊豆守時氏であった。そのことも念頭にあったのかもしれないが、直接には四段目切で城明け渡し使者としてやって来、塩冶の家士たちを嘲笑する薬師寺次郎左衛門が引かれたと見るべきだろう。しかし、貌好逃亡譚に焦点を絞るなら、伴内が追っ手となったことに注目される。その伴内を、

察するに事を管領の命に託して。塩冶の妻女を奪とり。師直が不義の望を遂げしめんとてのことにてあらん。(第三回)

と「度」した桃井が追い払うところは、へ大序へ鶴岡で、師直に言い寄られるかほよを、「いつもの非道と見て取る機転」により、「はや退散」と救ってやったことを利かせているだろう。さらに、桃井の口から発せられる、

鷹の雉犬の兎に汝が頭を替へ。鷹の羹を請べし。我家の菜刀の滋味を試べきや。回答如何……(第三回)

という台詞が三段目へ裏門への勘平の次の台詞に基づくのは言うまでもない。

ヤアよい所へ鷺坂はん内。己一羽で喰たらねど。勘平が腕の細ねぶか。料理塩梅くふて見よ。

さらに、撃退された伴内について、
観個空て鷺鷺行を作。拔足して逃去ければ……(第三回)

と語るのは、演劇における伴内の、
足の下をばこそくと。尻に尾のない鷺坂は。命からく逃て行。
という動作を写し取ったものである。とすればこの場面は、天保四年「二八三」の中村座所演時に「道行旅路の花聲」に作り替えられることになる、三段目の「裏門」を転化したものであることは明らかだろう。京伝は逃亡する主体をお軽・勘平から郷右衛門を伴った貌好母子に改めたのである。

このように考えるならば、京伝の発見したはずの「所類」をへ旅中

の艱難と見定めうる。判官刀傷のときに色にふけていた勘平は、帰参の期を待つべく鎌倉から京へ落ちて行く。その「落人」の縁で『太平記』の判官妻子が想起され、へ旅中の艱難の内実を『水滸伝』によって——配流の旅における苦しみを語る林冲故事あるいは宋江が逃亡のうちに苦しめられる挿話によって——充填したのが第三回の物語だったのである。

(第四回 「塩冶龍馬三鞭千里／寺岡神行一脚百歩」)

大星由良之助が黄蝶の闘いを見、闘争の兆しかと怪しむとき、力弥が早馬で到着し、判官の切腹を告げた。郷右衛門らに守られて到着した貌好母子を京都の判官弟石堂縫殿助の元に送り、大星は、忠義の士たちと党を結んだうえで、城を開け渡した。

四段目において、判官は切腹、大星は主君の短刀を手に仇討ちの決意を固める。第四回は、前半の判官切腹の場面を第三回冒頭に移したため、仇討ちの決心に焦点を当てている。鎌倉へ出雲と舞台を分け、前回の逃亡の目的地でもある出雲において急を聞くかたちに改めている。黄蝶の争いからお家に騒動が持ち上がることを予見する趣向が近松半二・竹本三郎兵衛他『太平記忠臣講釈』(明和三年「一七六六」初演)によるというのが野口隆の説だが⁽²⁶⁾、片島深淵子『赤城義臣伝』(享保四年「一七二九」刊)の記述も同趣であることを付記しておこう。いずれにせよ、これは、へ付会の論理によらない書き換え、増補が行われている

ることを示す。序文に示されたのとは異なる別の方法については、後に触れることにする。

五

第五回は五段目の「山崎街道」に付会する。演劇では鉄砲渡し―与市兵衛殺害―定九郎誤射と展開するところだが、京伝はここで本蔵の礼物押送と鉄鉄貞九郎一統による強奪を語る。

(第五回 「貞九郎剪得蒙汗薬／賀古川監押送金銀担」)

「京の薮医太田了竹は、大酔して家に帰ると、仏像などを打ち倒し寝込んだ。その夜中に、宴席への招待と欺かれ、何処へか連れ去られた。」了竹は松尾山の貞九郎一統の山寨で、家伝の蒙汗薬を献じて仲間に入るよう求められ、承知する。

桃井若狭助は足利尊氏の昇進祝いの輸送を加古川本蔵に命じた。一行が鈴鹿山をすぎる時、白酒売り・棗売り・旅人に扮した賊のため毒を盛られ、礼物を奪われる。本蔵は偽商人二人を討ち果たしたものの、礼物は取り戻せなかった。本蔵は礼物奪還後に死のうと心決し、賊を求めて去った。

回目が示すように、この部分は『水滸伝』第十六回「楊志押送金銀担／呉用智取生辰綱」に依拠する。たしかに、先行研究が注目するよ

うな蒙汗薬のトリックに関わる工夫が加えられたが、展開は「智取生辰綱」にほぼ沿っていると言つてよい。だが、『水滸伝』中の有名場面をただ取り込んだだけではなく、ここにも京伝なりの「付会の論理」を認めることができる。

山崎街道で与市兵衛を殺害し縞の財布の五十両を奪った斧定九郎と、計略によって金銀担を「智取」する晁蓋ら八人とは、方法にせよ規模にせよその状況が大きく隔たる。にもかかわらず両者を撮合して、鉄鉄貞九郎一統による略奪譚に仕立て得たのは何故か。様相の懸隔にも関わらず、「山道における盗難」に焦点を当てるとき両者は同一と見做しうる、というのが京伝の発想だっただろう。『仮名手本忠臣蔵』の「山道における盗難」と共通する話を『水滸伝』に求めたのか、あるいは、『水滸伝』の有名場面である「智取生辰綱」を付会するにあつた場面を求めて、「山道における盗難」という点で付会しうるのが定九郎だったと考えるべきなのか、いずれにせよ、京伝はわずかな共通項の発見に基づいて「山崎街道」と「智取生辰綱」を付会したのである。被害者を与市兵衛から加古川本蔵一行に変えたのにも京伝の「付会の論理」が働いていた。「智取生辰綱」の被害者は青面獸楊志である。楊志は大名府の梁中書からその舅である蔡太師への誕生祝いの贈り物を運ぶ途中で晁蓋らに襲われる。『仮名手本忠臣蔵』二段目、明日は師直を斬るという若狭之助の決心に賛意を示し、励まして寝間に送った後、馬に乗って駆けだした本蔵は、三段目「進物場」において、登城途中の師直に追いつき、進物を差し出す。賄賂を贈って桃井家を救お

うとしたのである。とすれば、へ権力者への礼物輸送」という点で楊志と本蔵とが共通すると主張することが可能である。『水滸伝』を模した礼物略奪の物語を語るとき、礼物輸送の役を割りふるのに適当な人物は本蔵を置いて他にいない。へ本蔵へ楊志への付会によって、山崎街道へ鈴鹿山に貞九郎と本蔵が遭遇することになるのである。

右の論理に従って付会しながら、『水滸伝』の設定を改めたところがある。梁中書は、

毎車二各一ツノ。黄旗ヲ挿シテ。其旗ノ上ニハ。又蔡太師ニ献ズル誕辰ノ礼物ト。大ニ文字ニテ書ツクベシ。

と、蔡京への生辰綱であることを誇示しつつ輸送せよと命ずるが、楊志はその指示を退け、

礼物ヲ車ニ積ム事ヲ休テ。乃チ十余櫃ノ荒物担ニ做リ詐シ。商客ノ体ニ妝ヒ。(中略) 脚夫ノ形ニ打扮セテ。

賊から身を隠すように密やかに輸送すべきことを主張し、それが容れられもする。が、『忠臣水滸伝』では、まさに楊志が危惧したような「進御足利將軍慶賀礼物」の文字を書き付けた小旗を掲げつつ押送するように、逆に改められている。挿画の小旗にも「慶賀礼物」と描き込まれる。京伝が『水滸伝』の記述に反してこのように改めたのは、演劇の本蔵が、

かこ川本蔵。衣紋繕ひ悠々と打通り。下部に持せし進物共。師直が目通にならべさせ……

と、進物を持参する場面を利かせたのに違いない。また、

黄金五十両白銀五百両；彩緞五十端。是等の礼物を一張の礼帖に記し。五脚の白木盤子に盛……

さらに「長唐櫃に収」という妙な荷造りをさせたのも、白台の礼物とともに本蔵が目録を差し出す場面を写している。

京伝は、こうした人の気づきがないところに着目して付会をおこなうのである。

『忠臣水滸伝』は『水滸伝』のへ智取生辰綱を重ね、へ山崎街道への定九郎へ与市兵衛の事件から鈴鹿越えでの貞九郎へ本蔵一行の事件へと作り変えたのだが、へ智略へこそがこの挿話の主眼だったと見ることでできよう。京伝は「その計略に一ひねり加えている」⁽⁹⁾のだし、後述のようにへ智略への担当者として太田了竹が登場させられてもいた。そのことを十分に理解していたはずなのにも関わらず、京伝は貞九郎が登場して一人一人首をはねるなどの残虐行為を付与した。次に引くのは、

腰刀を抜放て傍辺の松樹の枝頭を望み只一刀に斬落して依旧刀を鞘に収め。……

と、二段目のへ松伐りへもどきに松の枝を切り、礼物を奪って逃げ去った山賊に対する報復の決意を示した本蔵が、賊を追って立ち去ったあとの場面である。

且説。彼十余人のうち一箇の歩卒。原来酒を飲ざれば薬をも用ず。恙なきものあり。此場の光景を見て魂を消大に狼狽けるが。忽然として背後の大樹の松の筒より。明晃々たる刀の尖閃き出て。彼

歩卒が後心より肚をかけて刺透。歩卒は乃一声阿と叫び地上に倒れて死てけり。折しも山のうしろなる鐸鹿廟のあたりに鼓楽の声大に発り。山の木魅に響あひていと物さわがしかりき。斯て彼松の竈の裡に一個の大漢あらはれ出たり。乃頭には黒巾を裹み。身には皂服を穿たり。此大漢且頭を出して四辺を伺ひ。瞿々として箇の鼠洞を出るさまを倣て曲身て竈を出。手中に一梃の帯血刀を提。大踏步来りて。十余人の歩卒等尽涎を流し。倒居るを見て莞爾と咲。やがて刀を挙て逐個々頭を刎。地上に捨て置たる彼小旗を把刀の鮮血を拭ひて韃に収。只頭を点きつ、口裡語ることなく。遂に一条の間道をのぞみて逃去けり。(第五回)

『水滸伝』には人足のうち一人だけが毒にやられなかったなどとは語られない。京伝はそうした設定を加え、へ智取」とは相反する形で貞九郎の登場場面を書いている。

この場面は、歌舞伎の演出に類似するように思われる。

周知のことだが歌舞伎における『仮名手本忠臣蔵』演出史において、
 へ山崎街道」に大きな改変が二つあった(27)。

一つは、「只の追剥にて大嶋の広袖にて夜着の様な物」を着て登場する山賊的定九郎像から、「黒羽二重の古き着物に成やぶれ傘さして出る」身を持ち崩した浪人風の定九郎像への変更である(28)。初代中村仲蔵が明和三年へ一八六六江戸中村座所演時に工夫したとされるもので、現行演出の踏襲するところとなっている。扮装の変更にとどまらず、役の性根をも変更したと言つてよいだろう。ただし、もともと定九郎の

扮装についての記述はなかったのだし、こうした変更は必ずしも浄瑠璃本文から大きくそれるものではない。黒羽二重・破れ傘の定九郎が「オ、イ親仁殿。よい道連」と、おかるを売った半金の五十両を懐にした与市兵衛を追つて登場し、その後「貸して下され」に始まりついに与市兵衛を惨殺するに至るまでの進行を変える必要はなかった。仲蔵の定九郎もするように演じられただろう。

それに対して、もう一つの改変は、浄瑠璃本文と背馳する。すなわち、早替わりを得意とした四代目市川団蔵が天明元年へ一七八二江戸森田座で判官・由良之助・戸難瀬・定九郎・与市兵衛・義平・文吾の七役を演じたとき以来の演出である。定九郎と与市兵衛とは殺人者と被害者であり、その二人を同一の役者が演じうるように、掛け稲を利用した早替わりが工夫されたのである。その結果、浄瑠璃では二人のやりとりが長くおかれる場面が、戸板康二に従うなら「ヌツと出ることの効果」に気づき、次のように演ぜられることになった。

ト与一兵衛、金財布を押戴き、思ひ入れ。この時、掛け稲の間より、手を出し、財布を引つたくる。与一兵衛、悔りして与一兵衛 ヤア、こりや財布を。

ト立ち上がる。この時白刃出て、与一兵衛を貫く。これにて、ワツと苦しむ。時の鐘、凄き合ひ方、日暮し笛になり、掛け稲を押分け、定九郎、好みの拵らへにて出て来り、刀を抜く。与一兵衛、バツタリ倒る。定九郎、思ひ入れあつて、財布を取り、口に啞へ、血刀を拭ふ。この見得、時の鐘、忍び三

重。白刃を鞘に納め、財布の金を見てニツタリ思ひ入れあつて、首に掛け、死骸を上の方へ蹴込み

定九郎 五十両、忝ない。

祇園からもどる市兵衛が掛け稲の前にすわり、縞の財布をさし上げてはるか一文字屋の主人に謝するとき、ぬつと出た手が財布を掴み取ろうとする。驚き抵抗する市兵衛を、稲わらの向こうから突き出された白刃が貫く。(早替わりの場合は、稲わらの中に引きずり込まれていく市兵衛と入れ替わるように、陰で扮装を変えた) 定九郎がわらをかき分けて現れる。定九郎は「小判のつかみ読み」で五十両を確認し、財布を懐にして立ち去ろうとする。ところを猪が走り抜け、その猪を狙って勘平の放った銃弾に撃たれて絶命する。——団蔵の工夫を契機に、言わば、饒舌な定九郎から寡黙な定九郎へと、あるいは陽性の賊から陰性の賊へと、その人物像が変わってしまったわけである。

先に引いた『忠臣水滸伝』の場面は、掛け稲から現われる歌舞伎の定九郎を彷彿とさせないだろうか。「松の竈より。明晃々たる刀の尖閃き出て。彼歩卒が後心より肚をかけて刺透」のは、掛け稲から突き出される定九郎の白刃が市兵衛を貫くのに当たるし、貞九郎の「亾服」は、黒羽二重の衣装を思わせるだろう。「折しも」聞こえてくる「山の後ろなる鐸鹿廟のあたり」の「鼓楽の声」は、歌舞伎の「時の鐘」「凄き合ひ方」「忍び三重」などの下座音楽に対応する。なによりも、「只頭を点きつ、口裡語ることな」くこの場を立ち去る貞九郎は、浄瑠璃の饒舌さを脱ぎ捨て「五十両」とつぶやくのみの歌舞伎の定九郎とび

ったり重なるのである。京伝は歌舞伎の「山崎街道」をこの場面に写し取ったのではないか。(ただし、これも幕末の台本に基づいた推測であって、京伝の時代の演出は不明であるから、仮説にとどめざるを得ない。)